

ローマ人への手紙

第11章 (1)

今日の聖書におけるイスラエルとは何でしょうか？

- イスラエルは神の救済史の中心であるイエス・キリストと切り離せない重要な存在です(ヨハネ4:22)。
 - 特に救済の完成が近づいている終末の時代におけるイスラエルの役割
 - 新約の人々、教会に対する一つのモデル/お手本？イエスの肉体的血統を提供する？
- それ以上の役割を果たすのです。
- イスラエルの終末論的回復は単なる一民族の救いの問題ではありません。
 - 救済史的な意味と重要性を持っています。
 - イスラエルに対する正しい理解は、神の救済史に対する総体的な理解において重要です。

新約時代のイスラエルをどのように理解すべきか？

- ローマ書第11章は新約時代においてこの問題を直接的に扱っています。

→ 精緻な聖書的、神学的論証を経て明確な結論に至る

- ローマ書9-11章

歴史的に最も無視され、軽視されてきた(‘挿入章’)

- ローマ書の最も中心的なテーマは？
- ローマ書の記録の動機と背景
 - クラウディウス皇帝によるユダヤ人追放令(使徒行伝18:2)
 - ローマ教会内の反ユダヤ的動き

ローマ人への手紙11章の主要な論点

- イスラエルの倒れの秘密
- イスラエルの終末論的回復
- イスラエルと諸国との関係
- 神の人類救済の経緯と計画、神秘
- 福音と異邦人の救いに関する拡張された理解 – イスラエルの関連性
- 諸国教会の存在論的使命及び最後の時の呼びかけ

ローマ書第11章の主要な論点

1. メシアを拒絶した結果、イスラエルは神の契約の民として旧約における位置が無効になったのか？（1、29節）。もし契約の民としての位置が無効になっていないなら、その証拠は何か？（1節下-5節）
2. メシアを待ち望んでいたイスラエルがキリストを拒絶した理由は、彼ら自身の不信仰（20節）以外に、神が全人類の救いのために持っていた摂理的な意図や計画は何か？（11、25、28、32節）
3. この関連で、パウロが述べている教会が必ず知っておくべき秘密、または神秘とは何か？（25節）もしイスラエルの「つまづき」が最終的なものでないなら（11節）、イスラエルの最終的な民族的運命はどうなるのか？（23-24、26-27節）
4. キリストにおけるユダヤ人と異邦人の関係は何か？（17-19節）
5. イスラエルの民族的救いと旧約に約束された新しい契約の成就にはどのような関係があるのか？（26-27節）
6. なぜ神は、最初に選ばれた契約の民であるイスラエルのつまづき、これを通じた全異邦人の救い、そして最後にイスラエルの回復と救いという特別なプロセスを通じて全人類の救いを実現しようとされるのか？その背後にある神の意志は何か？

ローマ人への手紙 11章 1-5節

それゆえ、私は言います。神は自分の民を見捨てたのでしょうか。そんなことはありません。私もイスラエル人であり、アブラハムの子孫で、ベニヤミン族です。

神は、あらかじめ知っていた自分の民を見捨てることはありませんでした。あなたたちは聖書がエリヤについて語っていることを知らないのですか。彼はイスラエルに対して神に告発をしました。

「主よ、彼らはあなたの預言者を殺し、あなたの祭壇を壊しました。私だけが残し、私の命も狙われています」と言ったのです。

神からの答えは何でしょうか。「私は自分のために、バールにひざをかがめなかった者を七千人残しておいた」と言われました。

したがって、今もお恵みによって選ばれた者たちが残っています。

神は自らの民を見捨てたのか？

1 だから私は言う。神が自らの民を見捨てたのか？そんなことはありえない。

‘自分の民’を

- ここで‘自分の民’とは誰を指すのか？
- ‘自分の民’ = 教会？
- ‘自分の民’ = イエスを信じるユダヤ人？
 - 捨てられたのか？という質問自体が無意味である。

→ ‘自分の民’はイエスを拒否するユダヤ人を含むユダヤ民族全体である。

神は自分の民を見捨てたのか？

- 見捨てたのか？という問いの背景は？ - イスラエルが約束されたメシアを拒否し続けているため。
- 「見捨てたのか」の意味は？
 - 旧約時代から続く神とイスラエルの特別な関係: 契約関係
- イスラエルと神の契約関係は今でも有効なのか？
- イスラエルは依然として神の契約の民なのか？

そんなことはありえない!!

- ‘捨ててはいない’ → イスラエルに対する神の契約は今なお有効であり、イスラエルは依然として神の(契約の)民である。
 - どうしてイエスを拒否する者たちが依然として神の民であり得るのか？
- 伝統的な個人的な救いの概念とは相反する。
 - 一見理解しにくいだが、明確な聖書的結論である。
 - パウロのローマ人への手紙11章全体にわたる壮大な論証が必要な理由。
- イスラエルの選びは個々の救いの選びではなく、「集团的選び」であり、その選びは人類の救いのためのしもべとして用いられる「道具的選び」である。
- ローマ11:1の明確な宣言にもかかわらず、歴史的に教会はその反対の結論を主張してきた。

イスラエルを見捨てない証拠は何か？

- 1b 私もイスラエル人であり、アブラハムの子孫であり、ベニヤミン族である。
- 2 神は、あらかじめ知っていた彼の民を見捨てなかった。あなた方は、聖書がエリヤについて述べていることを知らないのか？彼はイスラエルを神に告発した。
- 3 主よ、彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇を壊しました。私だけが残り、私の命も狙われています。
- 4 彼に対する答えは何だったのか？「私は自分のためにバアルにひざまずかなかつた者を七千人残しておいた」と言った。
- 5 したがって、今も恩恵によって選ばれた者たちが残っている。

イスラエルを見捨てない証拠は？

- ‘残された者’が存在する。
 - 使徒パウロ自身
 - エリヤの時代の7000人の残された者
- なぜイスラエルの残された者の存在がイスラエル全体との契約関係の有効性を証明するのか？
 - イスラエルの‘残された者’は、神がイスラエルと結んだ契約関係を有効に保つための‘保証’と‘前金’である。
 - ‘イスラエルの残された者’は契約の根幹である。

イスラエルの残された者たち

「女性」と
契約の系譜

神の契約の系譜

- 女(創世記 3:15) – 「女の子孫の契約」
- アブラハムの子孫 – 「アブラハムの契約」
- イスラエルの残りの者
 - シナイ山の契約
 - 新しい契約

女－創世記 3:15-16

- 救済史全体に登場し続ける、救済史的役割/使命 → 啓示録12章の女
 - 契約の系譜、流れ
 - 信仰の系譜
 - 救済の通路
 - 女の子孫を生む
 - 蛇と蛇の子孫との敵対
 - サタンの集中攻撃対象
 - 神の超自然的介入と保護
- (セト、ノアの家族、サラ/リベカ、モーセなど)

女－創世記 3:15-16

- 妊娠したが、出産できず、苦しみを経験する

「主よ、妊娠した女が出産の 때가 近づき、苦しみを叫ぶように、私たちもあなたの前でそのようなのです。私たちは妊娠し、出産の苦しみを経験しましたが、風を産んだようで、地に救いをもたらすことができず、世界の住民を産むことができませんでした。」(イザヤ書 26:17-19)

「私が声を聞くと、それは女が出産する声のようで、初産する者の苦しみの声のようです。それはシオンの娘の声です。」(エレミヤ書 4:31)

「シオンの娘よ、出産する女のように力を込めて生み出せ。」(ミカ書 4:10)

女性－創世記 3:15-16

- しかし、女性は最終的に出産することになります。
 - 創世記 3:16、黙示録 12章

「主は言われた、私は妊娠させたので、出産させないということがあるだろうか。あなたの神は言われた、私は出産させる者であるのに、どうして胎を閉じることができようか。」(イザヤ 66:9)

「また、妊娠できなかった女性を家に住まわせ、子どもたちの喜びの母にさせておられるのです。ハレルヤ。」(詩篇 113:9)

アブラハムの子孫

- 女性(創世記 3:15-16)
- アブラハムの契約の対象者、受益者
- 契約の継承者、幹、担保者
- 全世界を祝福するために神が用いる救済の道、祝福の道

「あなたの子孫によって、すべての民族、すべての家族、すべての異邦人が祝福を受けるであろう」とあります。

(創世記 22:18; 26:4; 28:14; ガラテヤ 3:8,14)

アブラハムの子孫

- ‘ゼラ’
- 集合的単数名詞 – 一人または集団、両方を意味する
 - ‘種’または‘子孫’として訳される
- ‘種’ - メシア
- ‘子孫’
 - 肉体的: イスラエル
 - 精神的: 万国の教会

アブラハムの子孫

神の主権的な選び(ローマ 9:11)

神の恵みによる選択(ローマ 11:5-6)

- 「選択と排除(selection and exclusion)」
- では、選ばれなかった系譜はどうなるのか？
 - 神の祝福から除外されたわけではない
- 神の選びは偏愛的な選びではなく、神の主権に基づく機能的な選びである

アブラハムの子孫

- 誰がアブラハムの子孫になれるのか？
- 「アブラハムの信仰の足跡に従う者たち」(ローマ 4:10-11)
- 「アブラハムの業を行う者たち」(ヨハネ 8:39)
- - 観念的な知識や理解、知的同意を超えて、アブラハムが彼の全生涯を通じて示したように、忍耐と従順の行動によって証明され、現れるものであり、要するに生活の中で現れる信仰
- ⇒ 信仰の系譜
- このような信仰を持つ者だけが(イエスを信じる者の中でも)→ 義とされる

イスラエルの残りの者

- 「イスラエルの残りの者」

「イザヤはイスラエルについて叫んだ。イスラエルの子らの数がたとえ海の砂のようになっても、残りの者だけが救われるのだ。」(ローマ 9:27、イザヤ 10:22 から引用、またローマ 11:1-7、14、26)

- 「真のイスラエル」

「イエスはナタナエルが自分に来るのを見て、彼を指さして言った。「見よ、これは本当にイスラエル人だ。彼の中には欺きがない。」」(ヨハネ 1:47)

イスラエルの残り者 - 新約

● '神のイスラエル'

「割礼も無割礼も何の意味もない。ただ新しく作り変えられることが重要である。この規則を守る者と神のイスラエルに平和と憐れみがあるように。」(ガラテヤ6:15-16)

● '約束の子'

「しかし、神の言葉は無効になったわけではない。イスラエルの子孫である者が皆、イスラエルではなく、アブラハムの子孫も皆彼の子供ではない。ただイサクから生まれた者が子孫と呼ばれるべきである。肉の子供は神の子供ではなく、約束の子供が子孫とみなされる。」(ローマ9:6-8)

● '内面的ユダヤ人'

「外面的ユダヤ人はユダヤ人ではなく、外面的肉の割礼は割礼ではない。内面的ユダヤ人がユダヤ人であり、割礼は心の中にあり、霊にあり、律法の文面にはない。」(ローマ2:28-29)

● '真のオリーブの木の本枝'(ローマ11章)

イスラエルの残りの者

- シナイ山の契約

「イスラエルの残りの者は悪を行わず、偽りを言わず、口に欺きの舌を持たず、食べて寝ても驚かされる者はいない。」(ゼパニヤ 3:13)

「その日、イスラエルの残りの者とヤコブの族の避難者は、もはや自分を打った者に依存せず、イスラエルの聖者、主を真実に信頼する者になる。」(イザヤ 10:20)

- 新しい契約: キリストを告白し信じるユダヤ人たち(ローマ 11:1-9)

ナタナエル

「ラビ、あなたは神の子であり、イスラエルの王です。」(ヨハネ 1:45-50)

ペテロ

「あなたはキリストであり、生ける神の子です。」(マタイ 16:16)

イスラエルの残り者 - 旧約聖書

- ‘切り株’, ‘聖なる種’

「その中に十分の一がまだ残っているとしても、これも荒廃する。けれども、クリの木とオークの木が伐採されても、その切り株は残るように、聖なる種がこの地の切り株である」と主は言われた(イザヤ書 6:13)

- ‘ダビデを王にしようとした者’ - 象徴的

「イスラエルの残り者も皆、一つ心でダビデを王にしようとした」(歴代誌 12:38)

- ‘イスラエルの避難者’(イザヤ書 4:2)
- ‘ヤコブの家族の避難者’(イザヤ書 10:20-21)
- ‘エルサレムから避難する者’(ヨエル書 2:32)
- ‘ユダの部族の中で逃れ残る者’(イザヤ書 37:31-32)
- ‘シオン山で避ける者’(オバデヤ書 1:17)

イスラエルの残り者 - 旧約聖書

「ヤコブの中で罪を逃れる者たち」(イザヤ書 59:20)

「主の残された民」(イザヤ書 11:11, 16; 28:5; ゼカリヤ書 8:11-12; 14:2)

「国々の中にいるヤコブの残り者」(ミカ書 5:7-9)

「私の羊の群れの残り者」(エレミヤ書 23:3)

「ボズラの羊の群れのように神が集めるイスラエルの残り者」(ミカ書 2:12)

「その相続地の残り者」(ミカ書 7:18)

‘イスラエルの残り者’の役割:

● 契約の保護者、幹

- 神のイスラエルとの契約が続き、最終的に成就される契約の保護者、継承者（通路、幹）
- 神の超自然的な保護と保存

「ヤコブの家よ、イスラエルの家に残ったすべての者よ、私に耳を傾けよ。あなたたちは母の胎から私に与えられ、胎から私に担がれた者たちよ。あなたがたが老年に至るまで、私はそのようにし、白髪になるまで、私はあなたたちを抱く。私が造ったので、私は担ぎ、抱き、救い出す。」（イザヤ書 46:3-4）

→ 神は‘イスラエルの残り者’を妊娠させ（**conceive**）、育て（**carry**）、支え（**uphold**）、維持し（**sustain**）、救い出す（**rescue**）

‘イスラエルの残り者’の役割: 契約の保護者、根源

- ‘神が残しておいた種’

「また、イザヤが前もって言ったように、もし万軍の主が私たちに種を残しておかなかったなら、私たちはソドムのようになり、ゴモラのようにになっていたでしょう」(ローマ9:29、イザヤ6:9引用)

- 「主の熱心」によって‘イスラエルの残り者’が保たれていく

「ユダの部族の中で逃れた者は、再び下に根を張り、上に実を結ぶでしょう。なぜなら、残り者がエルサレムから出て、逃れた者がシオン山から出るからです。万軍の主の熱心がこれを成し遂げるのです」(イザヤ37:32)

『イスラエルの残り者』の役割：契約の保護者、根源

『契約の根源、保護者』としてのイスラエルの残り者の役割は、特にアブラハムの契約とシナイ山の契約の相互関係において際立っており、また明確に示されています。

シナイ山の契約のもとで、イスラエルはアブラハムの契約で約束された祝福を享受するためにはトーラーを遵守するという条件を満たす必要があります。

イスラエルがその条件を満たさない場合、シナイ山の契約に従って祝福を享受できず、その結果、アブラハムの一方的で永遠の契約のもとで与えられた祝福の約束も実現なくなり、アブラハムの契約自体が脅かされることになります。

→ ここに『イスラエルの残り者』の役割があるのです。

契約の根本、保護者、担保者

- アブラハムの契約とシナイ山の契約の相互作用

イスラエルの中で神の契約に不従順な世代

⇒ 契約の祝福から除外される(シナイ山の契約)

⇒ しかしイスラエル民族に対する永遠で無条件のアブラハムの契約自体は無効にならない。

神は不従順な世代の中でも、少数でも信仰と従順で応答する者たち(「イスラエルの残り者」)を通じて、次の世代にイスラエルとの契約関係を維持し、アブラハムの契約を最終的に実現させていく。

→ 「イスラエルの残り者」の存在自体が、イスラエルとの神の契約が依然として「有効である」という証拠である(ローマ11章)。

土地の約束

- アブラハムの契約: 土地の「居住権」はアブラハムの肉の子孫(イスラエル)にのみ永遠に与えられる。
- シナイ山の契約: 土地の「居住権」は条件付き: 信仰と従順の反応。
 - 1) キリスト以前: 神のトローラー
 - 2) キリスト以後: イスラエルのメシア

❖ イスラエルの不従順な世代? → 追放！！

しかし、アブラハムの契約に基づいてイスラエルに与えられた土地の約束は決して取り消されない。神は不従順なイスラエルの中に「イスラエルの残りの者」を残し、彼らを通して契約を維持し、最終的に土地の約束を成就される。

例) 荒野で倒れた第一世代 / ヨシュアとカレブ

⇒ 「イスラエルの残りの者」 = 「契約の系統」

土地の約束: 歴史的事例

- 土地の契約とイスラエルの残りの者 - 歴史的な例
 - 最初のカナンへの入国: ヨシュアとカレブ
 - バビロン捕囚: ダニエル、ゼルバベル、エズラなど
 - 全民族への捕囚(西暦70年から135年): メシアニックユダヤ人たち

「残り者」の役割：契約の枝、保護者、担保者

→「イスラエルの残り者」は、その存在自体が神のイスラエルとの契約が依然として「保たれている」証拠となるため、「イスラエルの残り者」は「契約の保護者」としての役割を果たし、それはその契約が必ず成就することを示すため、同時に「契約の担保者」としての役割も果たします。

「イスラエルの残り者」は、一見矛盾するアブラハムの契約とシナイ山の契約を同時に成就し、また神の恵みと慈悲、正義を同時に実現する神の方法です。

エリヤの絶望

(列王記上 **19**章)

列王記上 19章の背景

- イスラエルでは3年間続いた干ばつがあった(18:1)
 - アハブは長い間、エリヤを各国で探し続けていた(18:10)
 - イゼベルはその間、主の預言者たちを滅ぼしていた(18:4)
- エリヤは主の命によりアハブに会いに行く(18:2)
 - アハブ:「イスラエルを悩ませる者よ、お前か？」(18:17)
 - エリヤ:「イスラエルを悩ませているのはあなたとあなたの家族です – バアル崇拝の結果です」
- バアルの預言者450人 + アセラの預言者400人との火の対決を提案
- エリヤのカルメル山での対決(民の前で)と勝利(18章 20-40節)
 - エリヤ-民:
神様への態度を決定するように促す、「主の預言者は私一人だけ残っている...」
 - バアルの預言者たちを嘲笑する(18:27)
 - 主に大胆な祈りを捧げる(18:36-37)
 - バアルの預言者たちを全て捕らえ、殺す(18:40)

列王紀上第19章の物語の背景

- 雨を求める切実な祈りーその応答として大雨が降る(18:41-46)
- アハブに大胆に告げる(18:44)
- 主の力が働き、大雨の中で腰を締め、アハブの馬車の前でイスラエルまで走る(18:46)

列王紀上第19章

- イゼベルが明日エリヤの命を奪うと警告する(19:2)
- エリヤは命のために逃げ、ベエルシェバに行く(19:3)
- 一人で荒野に進み、ジュニパーの木の下で主に死を求める(19:4)

→ エリヤが死を求めるほどの深い落胆と絶望の中にあったことを示している。

(質問) **エリヤの落胆と絶望の原因は何だったのか？**

エリヤの落胆と絶望の原因は一体何か？

- イゼベルの殺害脅迫への恐れ？

火の対決前のエリヤの言動、火の対決の状況など、荒野に逃げる直前までエリヤが示した姿は？ ⇒ 明らかに不当な理由

- 火の対決前、すでにアハブは長い干ばつの責任をエリヤに問おうと何年もエリヤを探していたにもかかわらず、命の危険を冒してアハブに会った。
- 火の対決で負けることが明らかであるにもかかわらず、最初に対決を提案した。
- バアルの預言者たちの前で堂々とし、少しも恐れを見せなかった。
- 主の力による超自然的な勝利を収めた。
- バアルの預言者数百人を剣で殺した強い心。
- 大雨を降らせる祈りの力 + 主の能力が満ちており、アハブの前で雨の中を走った姿。
- 死を恐れて逃げた者が、逆に主に死を求める？

⇒ 単なる死への恐れで説明するには説得力がない！

エリヤの落胆と絶望の原因は一体何なのか？

- ‘魂の暗い夜’？ (キリスト教心理学)
- ‘うつ病’？, ‘疲労’、‘霊的停滞’？
- サタンの攻撃？

⇒ 説得力のない推測！

⇒ 答えは聖書の本文そのものであり、特にエリヤの嘆きとそれに対する神の答えにある！

「エリヤはその場所の洞窟に入って、そこに留まっていると、主の言葉が彼に臨んで言った、『エリヤよ、なぜここにいるのか？』彼は答えた、『私は万軍の神、主に対して非常に熱心である。なぜなら、**イスラエルの子らがあなたの契約を破り、あなたの祭壇を壊し、剣であなたの預言者たちを殺したからである。そして私だけが残っているが、彼らは私の命を奪おうとしている。』**」(19:9-10, 13-14)

⇒ エリヤは自分がイスラエルの中で唯一の‘イスラエルの残り者’であると固く信じていた。

エリヤの失望と絶望の真の原因

第一に、エリヤは自分の民、すなわち神の契約の民として召されたイスラエルが、全て主を裏切り、バアルを崇拜する悲惨な現実**に絶望していた。**

火の対決での劇的かつ圧倒的な勝利とは？

→ **ただ神の全能の力によるエリヤ個人の勝利に過ぎない。**

→ **イスラエルの民が主に対する裏切りから立ち返ったという証拠は全くない。**

19:10節でのエリヤの答え。

エリヤの絶望の第一の原因は、神の民として召された自分の民族が、神の契約を裏切るイスラエルが直面している惨憺たる霊的現実**であった。**

→ **決して自分の命への恐れではない。**

エリヤの落胆と絶望の真の原因

次に、エリヤは18:22と19:10、14節から見て取れるように、神の預言者は皆殺され、自分だけが唯一の神の預言者だと信じていました。すなわち、彼は自分が唯一の『イスラエルの残り者』だと信じていました。

- しかし、イゼベルは彼自身をも殺そうとしています。

もしエリヤが自分自身をも失ったら？

→『イスラエルの残り者』が消えることになる

→神がイスラエルとの契約関係を維持する唯一の糸が失われることになる

→イスラエルはもはや神の民ではなく、神に見捨てられることになる

⇒ **これこそがエリヤが絶望した真の原因です。**

エリヤの落胆と絶望の真の原因

エリヤの絶望は、

- 個人的な生命や安全に対する懸念や恐れ、または突然訪れた個人的な精神的、霊的、または信仰的危機によるものではなかった。
- それは、聖なる契約の民として召された愛する自民族が直面している絶望的な霊的破綻の現実及び「残りの者」の消滅によって、神からその民族が永遠に見捨てられる状況に直面していることから来る絶望であった。

神の答え – 7000人の残された者がいる

- 神の答えによって明らかになるエリヤの絶望の真の原因: **‘残された者’の存在**
「しかし、私はイスラエルの中に七千人を残す。彼らは皆、バアルにひざまずかず、バアルに口づけしなかった者たちである。」(19:18)
- 神の答えは、エリヤだけでなく七千人の「イスラエルの残された者」がいるということであった。もしエリヤの絶望の原因が単に自分の死への恐れや鬱、魂の暗さにあったのなら、これがエリヤにどんな慰めを与えることができ、どうやって彼を絶望から救い出すことができただろうか？
- しかし、神の答えはまさにエリヤの絶望の原因を貫き、それを癒すものであった。**イスラエルにはエリヤ以外にも七千人の残された者がいるならば、イスラエルと神との契約関係は依然として有効である**。彼らはイスラエルが神に見捨てられていない証拠である。自分の民には希望があるのだ。それならば、自分の一つの命はたとえ殺されても構わないのである。

→ **ローマ人への手紙 11:1-5節における使徒パウロの論証の核心**

イスラエルを見捨てない証拠

イスラエルの「残り者」の存在

「神が自らのために恵みによって[選ばれた]残り者を残すことは、民族的な約束への契約金として、また遺産に対する神聖な証明として存在する。」(J. Lanier Burns, "ローマ人への手紙11章における民族イスラエルの未来")

「使徒パウロは自身の信仰を、民族が拒絶されていない証拠として提示した。彼はまた、「恵みに選ばれた残り者」(ローマ11:5)が神が民族全体を拒絶していない証拠であると確信している。パウロはここで「全体は義なる残り者によって聖なるものとされる」という集団的代表性の原則を適用している。」(ジャスター, 『取り消せない召命』82)

エリヤの治療の場所 – シナイ山: 契約の最初の場所

- 神がエリヤを癒す場所はどこか？
 - シナイ山、イスラエルの民が神と最初の契約を結んだ場所。
- シナイ山まで40日間、昼夜を問わずエリヤを導く。
 - 40年間、荒野で常に試練に立ち向かうイスラエルを忍耐し、最終的にイスラエルに契約を守らせた神の信実さを思い出させる。
- 最初の契約の地で7,000人のイスラエルの残り者がいることを知らせる。
 - イスラエルとの契約が有効であることを確認する。
- イスラエルに対する契約が神から確認されたエリヤ。
 - 真の絶望の原因が解消される。
 - 新たな力と使命を受けて旅立つ。